

平成22年度 学校経営計画の検証結果

検 証 基 準

検 証 基 準	基 準 の 定 義
A	職務遂行において、目標を十分に達成することができた。
B	職務遂行において、目標をおおむね達成することができた。
C	職務遂行において、目標達成にはまだ不十分であった。
D	職務遂行において、目標および具体的な取り組みを見直す必要がある。

分掌名	教務部	達成目標	検証	活動経過とその成果（改善策）
		① 到達度評価の評価精度を向上させ、指導と評価の一体化を図って学力向上を図る。	A	<p>① 到達度評価導入2年目にして、同評価そのものの意味について、教職員間でかなり共有ができてきた。各学期末時の評定作成時だけでなく、学習指導（授業）中の評価意識についても、少しずつ改善がなされてきた。</p> <p>「指導と評価の一体化」を目指した評価研究（研修）を、今後も教科単位または全体として実施し、評価精度の向上をさらに目指して行く。</p>
		② 新教育課程の円滑な実施、高大接続の観点から二期制の実施に向けて検討する。	B	<p>② 昨年度より教務を中心に、以下の観点で「二期制導入」の検討を行った。</p> <p>1) 半期単位での履修 2) 高大連携、単位相互認定 3) 授業時数日数確保、 4) 考查内容と回数 5) 夏期休業中の学習</p> <p>これらの観点で、二期制の年間行事予定表を作成し、シュミレーションを行い、検討を行ってきたが、新学習指導要領本格実施に向けて、また、生徒の学習効果への影響を踏まえた上で、さらに詳細についての検討を次年度も引き続き行う。</p> <p>また、「2) 高大連携、単位相互認定」については、平成23年度から大妻女子大学との連携により実施されることが決定した。</p> <p>「3) 授業時数日数確保」については、次年度は三期制のまま考查後も授業を行うこと確保する。</p>
		③ 体験活動を含めた各種行事について本校教育課程上での位置づけと、配置の再確認を行う。	A	<p>③ 中1高1オリエンテーション旅行、中2環境学習、中3平和学習、高2歴史文化研究などを、本校基本シラバスに則り、6年間の生徒の発達段階を踏まえた上で、その行事の目的目標をより明確に共有できるよう整理を行った。</p> <p>また、生徒の発達段階を意識的にとらえやすくするため、それらを他学年の行事と共に一覧化することで、各学年の行事の目的目標の比較できるようにした。これにより、当該担当学年での打合せが円滑にできるようになり、各行事の事前指導から事後指導までの計画を早期に作成することが可能になった。</p> <p>また、実施計画・学習計画の作成、実施記録・まとめ・成果物や発表方法の検討、振り返り、目標に対する検証等の一連の流れについて、ワンシートに記入できるように書式の定型化を行った。これにより、各実施学年の積極的な創意工夫を、次学年への引継ぎ学習モデルとすることができるようになった。</p>

④ SS 後継ソフトの検討及び導入までの進行管理、到達度評価導入に関わるシステム上の支援体制作りを行う。	B	④ IT委員会での新校舎全IT構想打合せの中で、成績学籍管理ソフトについて教務部の視点から数社間で比較検討を行い、入札・業者決定まで終了したところである。データの移行や具体的な操作管理方法の検討、エンドユーザ向けのマニュアル作成・支援等を来年度行う必要がある。
⑤ 新指導要領移行実施までの教科書、副教材採択における各教科への支援体制作りを行う。	B	⑤ 現在は教科ごとに新指導要領による変化を確認し対応を検討する段階である。業者との連絡を行い、新指導要領に準拠した副教材の有無を調べているが、数学と理科の一部で、新指導要領での追加内容を、補助教材として出しているに過ぎず、本格的な支援は次年度以後になる。副教材の見本の送付は、遅れがちなので、採択がスムーズにいくように早い送付を働きかけている。

分掌名	進路部		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
① 平成25年度の高等学校新学習指導要領に対応した新教育課程を策定する。それに合わせて、移行期間の年度ごとの教育課程を策定する。その際、現在の取り組みを振り返り、実態や課題をよく把握した上で、改めて、本校のスクールアイデンティティ（SI）を明確にするとともに、新課程導入の成果を学校の活性化と効果的な広報に結びつけ、活かしていく。	B	① 「新学習指導要領を踏まえた新しい教育課程編成に向けて」の本校の考え方、進め方を各教科で協議し、1冊の冊子にまとめ、理事会に提出した。その概要を1枚にまとめたハンドアウトを作成し、学校説明会などでも配布をして広報に役立てた。それを元に教育課程編成委員会を定期的に開催し、平成23年度高校入学生（アドバンスト1期生）の教育課程を一部改訂して策定した。次に平成24年度からの新教育課程理科・数学先行実施の教育課程の案を作成した。さらにそれをベースにした平成25年度からの新課程対応の教育課程を作成している途中である。それに合わせ、理科・数学の新課程対応のセンター試験の出題方式などの情報を精査した。新課程対応の平成25年度からの教育課程の策定に向けて、引き続き、本校の進学動向、外部環境の変化などを十分に踏まえながら検討を進めていく。	
② 中学1年から高校3年まで各学年の進路シラバスに基づいた計画的な進路指導・ガイダンス・面談指導などを行い、進路意識を向上させるとともに、最終的なゴールであるキャリアプランの確立と進路目標実現を達成する。特に平成22年度は、中学時、特に中学3年次を進路指導上の最重要学年と捉え、進路ガイダンスや面談指導を充実させる。	B	② 定例の進路部会議で、各学年の進路シラバスによる進路学習、ガイダンスなどの進め方をその都度確認し、シラバスに沿った進路ガイダンスの実施の徹底を図った。新しい「進路指導の手引き」の準備を進め、「進路部通信」はここまで18回発行した。中学3年時の進路ガイダンスで、高等学校のカリキュラムの説明などを行った。学校評価（生徒・保護者）における進路指導の満足度を精査し、生徒の進路目標を実現する上で有効なガイダンスになるように改善に努める。	
③ 生徒の学力向上と希望進路実現のための具体的な目標を次のように設定する。 1) 高校3年生では、大学入試センター試験を全員が受験し、本校の平均点が全科目で全国平均を上回る。 2) 中期目標で示された平成22年度卒業生大学合格実績を達成する。 3) 中1～高2生では学力推移調査、全国模試での偏差値が過年度比較、経年比較とも前年、前回を上回る。 4) 中学生、特に中学3年生に高校卒業まで、本校の教育課程は「シームレス」であるという意識を持たせる。	B	③ ① 具体的目標についての検証は以下の通りである。 1) 高校3年生の大学入試センター受験率（リサーチ実施者 192名）は、91%。大学入試センター試験の結果は、英語、数学ⅡB、日本史B、化学Ⅰなどは全国平均を超えるところまで伸びてきたが、全教科が上回ることはできなかった。しかし、ほとんどの教科・科目で昨年度を上回る成績を修めた。 2) 進路指導の原則（安易に推薦入試やA0入試に頼らず、一般入試にチャレンジしていく）が生徒にしっかりと浸透してきた。指定校推薦志望者は6名、大妻女子大学指定校推薦は4名と少なくなっており、約80%の生徒が一般受験に臨んだ。合格実績は最終的な結果は今後、HPなどで伝えていくが、模試動向から合格実績目標を達成できるところまで来た。国公立大学についてはセンターの平均点が高く、志願者も全国的に増えており、ハイレベルな入試になることを受け、最後まで様子を見守る必要がある。 3) 高2：いずれの教科も前年度を上回る学力動向を達成している。生徒に模試自己採点をさせ、すぐに振り返りなどを行い、生徒自身に課題を把握させるなどの取り組みが結果となって表れている。 高1：国語、英語は前年度とほぼ同じくらいの成績まで伸びてきた。数学は少し伸び悩んでいる。学力下位層が多いことが課題である。学力動向は伸びてきているので、地道な指導を継続していく。 中3：学力推移調査で、国、数、英とも前年度の学力を上回った。アドバンストクラスは3教科の平均偏差値59.2まで伸ばすことができた。 中2：国、数、英とも前年度の学年の学力を若干下回っている。アドバンストクラスの3教科平均偏差値は56.6であった。ただし上昇傾向にある。 中1：国語、英語は前年度とほぼ同じ学力動向。数学に課題があった。アドバンストクラスは2クラスになっており、3教科平均は53～54。上位生をさらに伸ばしていく取り組みを続けていく。	
④ 帰国生の特性を生かした学習指導、進路指導を行い、進路希望を実現する。過去の帰国生卒業生の希望進路実現実績を上回る。	B	④ 帰国生（英語圏から）は、ほぼ全員が高い英語力をキープし、模試偏差値も60以上である。帰国生の大学合格実績は2月7日段階では未定だが、レベルの高い大学へのチャレンジをしている。帰国生の特性を踏まえた進路指導が定着し、高い目標へチャレンジする帰国生が増えている。帰国生の保護者懇談会も大妻女子大学の服部教授を迎え、講演をいただけるようになり、取り組みが充実してきた。	
⑤ 高大連携、接続プログラムをこれまでの取り組みを踏まえ、さらに発展させる。新課程カリキュラムの中に高大連携を位置づけられる段階まで踏み込み、大学、高校の相互での単りキュラムの中に高大連携を位置づけられる段階まで踏み込み、大学、高校の相互での単位修得のシステム策定を具体的に検討していく。大学での学びを高校段階から組織的に体験させ、進路意識、学力の向上に結びつける。	B	⑤ 過去2年間の実践を踏まえ、大妻女子大学家政学部食物学科との連携講座が充実してきた。今年度も約20名が参加。大学の先生方からも一定の評価を得た。また、文学部、人間関係学部、社会情報学部との連携講座、授業も実施された。次年度からは食物学科との連携講座が、正規の教育課程の中に組み込まれ、履修認定がされることが決まった。	

分掌名	生徒部		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
① 躰教育・情操教育の指導体制の確立		B	①生徒会活動を主体とした「学校生活マナーのさらなる向上」を目指す取り組みがなされた。 ア) 整美委員会を中心とした活動：清掃状況の点検・表彰（賞品に金のチリトリ、銀のホウキ） イ) 生活委員会を中心とした活動：標語を作成し挨拶のさらなる徹底に向けた運動 ウ) 生徒会幹部を中心とした活動：地道な生活ルール徹底の訴えと改善 以上の活動を中心に躰教育は継続的に行われ、雨水が地面に染み渡るような効果を得はじめている 情操教育として、道德教育の重要性を再確認し、来年度からの年間計画を組み直した。 ・ 中学に道德教育を重要視し、本校で独自に実施している「ピアサポートトレーニング」を土台に置いたシラバスを作成した。華道、茶道も道德教育に含み、生徒の発達段階に応じた教育内容を作成した。学祖大妻コタカ先生の精神を学ぶ授業を具体化した。
② 携帯、ネット関連教育の継続		C	②生徒部通信、保護者会にて継続的に生徒のWeb利用上の留意点を指導。しかしながら、過年度に比べその徹底が不足していた点が反省点である。
③ 清掃活動の定着		A	③躰教育と重なる部分がある。整美委員会を中心に大妻中野の清掃の仕組みは定着してきた。
④ 学校行事の充実と成功		A	④体育祭・文化祭・合唱コンクールなど、行事では生徒係がリーダーシップをとりよく取り組んでいた。以前より蓄積されたマニュアルが生徒中心に見直され、その時代、環境にあった取り組みが改善されている。校舎建築中というハンデを克服し、高レベルな行事内容が続いている。
⑤ 校舎建築に伴う生徒の安全対策		B	⑤今年度は安全面での大きな危険は発生しなかった。しかし、個々生徒にとっての不便な点を生徒自身が工夫していた。体育の授業・クラブ活動（旧中野六中での実践）も幸い事故なく過ごすことができた。引き続き、最優先事項として生徒の学校生活の安全対策を講じる必要がある。
		A	*生徒用の昼食として「こおらいけん」への注文が可能となったことは、生徒にとって非常によいことであった。今後も継続したい。

分掌名	入試広報部		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
①大妻中野の特色ある教育活動の広報に努める。		A	①学校説明会、学校案内（スクールガイド）、広報誌コスモス通信、その他各種広告媒体などを通して、本校の教育活動を広報する事につとめた。本校のホームページを通しての広報活動も昨年以上に充実してきている。
②中学入試について、入試問題の質的向上を目指す。また、中学入試の運営が、滞りなく適正に遂行されるように計画、運営する。		B	②中学入試については、広報部員を中心に全教職員の協力を得て、滞りなく遂行することが出来た。入試問題については、その内容・レベル等について、さらに改善をはかる必要がある。
③中学入試結果の検証をとおして、各種のデータを分析・検討し、次年度入試の骨格をつくる。		A	③中学入試結果を検証し、募集要項・広報活動方針について次年度入試に向けた方針を検討していく。
④広報活動、入試業務に全教職員をあげて取り組めるよう、協力体制を整える。		B	④入試業務については、いまだ課題は残るものの、全教職員の協力体制のもと、問題なく遂行することができた。
⑤広報活動への卒業生・保護者の協力体制について検討し、全教職員との連携のもと、一体となった広報活動を行う。		B	⑤保護者の方からの協力としては、杉並・中野フェアへの個別相談について後協力をいただいているがオープンデーや説明会などでもご協力いただけるよう要請していきたい。また、卒業生の広報活動への協力体制についても検討したい。

学年	中学1年			
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）	
①	新学習指導要領をふまえ、新教育課程を円滑に実施するとともに、到達度評価を利用し学力向上を図る。	B	① 新学習指導要領も視野に入れ、6年間を見通して教科指導を行ってきた。到達度評価は、提出物や小テストを点数化し評価できるので、定期試験の結果のみにとらわれることなく日頃の学習を大切にすることができた。	
②	体験的な学習により人間関係形成能力を育てるとともに、ピアサポートの実施により情操教育の土台を築く。	C	② 道徳の時間を利用して、年に4回ピアサポートを実施することができた。7クラス同時に行うため、担任によって行われたが、どのクラスもよく取り組み、人間関係形成に役立ったと思う。来年度に向け、ピアサポートについては、もう少し中学生向けの内容を検討する必要があると感じた。	
③	「建学の精神」「校訓」「教育目標」を柱に大妻中野としての躰教育の下に、社会性を育み、規範意識の定着を図り、保護者との連携を強める。また、学年の行事などを通して地域との連携もより深める。	B+	③ 箱根オリエンテーションをはじめ、各々の行事を通して中学1年生としての躰教育が十分になされ、社会性が育まれた。大妻コタカ先生に関する講演会や授業を行い、大妻精神の定着を図ることができた。授業参観や保護者会・保護者面談に限らず、必要に応じて保護者との連携も密にとった。さらに、奉仕活動として学校周辺の清掃活動を行い、地域との関わりを持つこともできた。	

学年	中学2年			
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）	
①	新学習指導要領に基づき、学力の育成を図る。 —中学2年時点で必要な基礎的・基本的な知識、技能と応用力の育成を図る。	B	①教科担当と学年団で連絡を密にとりながら生徒の指導にあたったので、ある程度の成果は上がった。下位層の生徒についての指導をもっと考える必要がある。	
②	「大妻中野」の躰教育の下で社会性を育み、規範意識の定着を図る。	B	②規範教育についてはあらゆる機会を捉えて行なってきた。今後も粘り強く実施していく必要がある。	
③	学校行事・特別活動などの集団活動や道徳の授業などのあらゆる機会に体験活動・言語活動を取り入れることにより心の教育の充実を図り、豊かな情操を育む。基礎学力の定着とともに学習への意欲、興味・関心を高めていく事、学年行事を通して、社会との関わりや他者との好ましい人間関係を育てる。	A	③ピアサポート学習や環境学習旅行の事前事後指導、街歩き～中野地域商店街訪問、平和学習旅行事前指導等で話し合いや地域の方達との交流を行い、コミュニケーション能力をつけるような指導を行なった。今後もあらゆる機会を捉えて社会性や人間関係構築能力を育てていく必要がある。	
④	中学2年次において必要な進路に対する意識や考えを持たせる。	A	④卒業生の講演や街歩き～中野地域商店街訪問等を通して仕事に対する知識を持たせるよう指導したが、来年度の職場体験を通して、仕事や自分の将来に対する認識がさらに深められるよう取り組んでいきたいと考えている。	

学年	中学3年			
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）	
①	基礎学力の定着を図り、高校とのスムーズな接続のために、より高度な学習への意欲・興味を持たせ、進路意識を育てる。	B	①学習の取り組みについては、もう少し積極性や発言力が求められるが、基礎学力については、外部テストの結果をみても向上している。一人一人の能力はあるのだからもっと自信を持たせたい。	
②	7つのルールを徹底していくことで、しつけ教育や安全、安心、充実できる学校生活の教育指導を行い、また基本的生活習慣の育成を図っていく。	C	② ものごとを判断する力がまだしっかりと身につけていない面もみられるものの、清掃などにおいては昨年と比べて、自主性がでてきているようである。	
③	学校行事・学年行事（平和学習・地域での職場体験）を通して社会との関わりや他者との良好な人間関係を築いた上で、しっかりと自身の考えを持ち、行動できるようにする。	B	③ 7つのルールのなかで3つぐらいの項目にしぼって徹底させるとよかったのではないかと。平和学習や職場体験などの行事においては計画的に取り組むことができ、また、生徒も日頃は言葉遣いなどで心配な点もあるが、きちんとした態度で責任ある行動をとることができた。	

学年	高校1年		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
①	高校生活全般における自主的な活動ができるように指導する。その過程において、生徒各自が自分を見直し、大妻中野生としてのプライドを持つようにする。	B	① 歴史研究旅行準備委員会等、生徒中心の活動により、各自が自分を見直し、自主性を持つようになった。各自が自分を変えていこうという意識・努力がみられた。改善点としては、教員が、各自の努力を認めてあげること。認めてあげることによって、プライドも生まれてくる。
②	学力の向上を図り、模試においては全国平均偏差値53以上の学力を目標とする。	C	② 目標値には達しなかったが、実力をつけつつあるという手ごたえは感じている。特に、今の自分の成績を意識し、何をしなければならないか考えるようになってきている。
③	社会性を身につける。他者を大切にすることを養う。	B	③ ホームルーム活動・学年集会を通じて、他者を意識して行動できるようになってきている。課題は、今のまま継続させること。来年度も継続させたい。
④	各自の進路について、真剣に考え、今何をするか自覚するように指導する。	B	④ 会社訪問、進路ガイダンスなどを通じて、進路について意識するようになった。特に、10年後、20年後を考えて、今の自分が何をすべきなのか。考える生徒が増えている。今後の課題は、生徒の目標を、認めてやること。否定的に考えないようにしたい。

学年	高校2年		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
①	高校生にふさわしい自覚と良識を持たせ、「自主自律」の精神を確立させ、何事においても自発的に積極的に責任を持って行動できるようにする。	B	① 学年目標に「自主自律」を設定し、ことある事に喚起し、自覚を促してきた。進路を意識し、そのことが少しずつ行動規範となっていく生徒もいるが、大局的に見ればまだまだ十分とは言い難い。しかし、このことが人間的な成長、短期的には進路目標実現のためには必要不可欠な要素でもあるので、高校3年次においても、引き続き学年目標に設定し、自覚を促していきたい。
②	自己の進むべき進路を明確にするとともに、その目標到達に必要な学力・知識力・思考力をつけさせる。目安として、進研模試3教科平均で53以上の学習到達度を目標とする。	B	② 進路の目標設定については意識付けすることはできたが、その目標到達に必要な3つの力の習得についてはまだまだ不十分、基本的な部分の習得が十分に達成できていなかったように思える。ただし、少しずつではあるが学習習慣がついてきているのも事実で、その結果として、1月段階の記述模試では国語52.2、英語52.2、数学（選択者）53.9と、当初の目標設定に肉薄しており、また、模試の成果も7月に比較して少しずつではあるが伸びを見せている。また、現高3学年の同回と比較しても、文系3科目（英国地歴）だけを見れば、1ポイント上回っている。次年度はいよいよ到達目標を実現する年であるので、目標設定ももう少し高く設定する必要がある。
③	①及び②に通ずる精神力や体力、行動力を身につけさせる。特に、精神面について強化し、困難に打ち勝つことのできる人間根本の力を伸ばす。	C	③ 精神面の強化は必要不可欠な要素であるが、日常的な学校活動の中でそうした場面を臨機応変に設定し、生徒たちに投げかけることは実際にはなかなか難しい状況であった。そうした機会をもっと学校行事や課外活動で与えられるように、学校全体で改めてアイディアを出し合う機会を設けたい

学年	高校3年		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
① 進路結果に結びつく学力向上の基本である自学自習の習慣を確立する。	B	①高校2年の時と比較すると、受験生としての自覚が出てきたことにより、全体的には学習への意欲は高まったと思われる。一部の生徒については十分に自学自習の習慣が確立されたといえる。	
② 将来設計を自己決定し、希望進路先への合格実現にむけての学習への取り組みを確実なものにする。	B	②生徒個人が自己の適性を見つめ、担任や教科担当の指導のもとさまざまな可能性に向けて努力した。長足の進歩を遂げた生徒も多くいた。	
③ 基本的な生活習慣を疎かにせず、体力維持と人間関係における相互理解を目指す。	B	③受験勉強に時間を注ぎこみながらも、かけがえのない友人関係を大切に思い築いている様子が見て取れた。	
④ 生徒・保護者への情報提供は適切に行い、理解と協力を得る。	B	④保護者への情報は進路部からのものを中心に提供したが、何より生徒に理解を徹底させるべく、学年の進路係りの指導のもともれのないように心がけた。	

教科名	国語科		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
① 授業研究を通じて質の高い授業を目指す。 ② 各種テスト等を活用して生徒の学力を把握し、日々の授業改善につなげる。 ③ 言語活動のより一層の充実を図る。		B B B	①授業アンケートや授業見学などを通じて、教員の視点からだけで授業を点検するのではなく、多角的な視点で授業を見直すようにした。 ②模擬試験や小テストの結果を踏まえて、授業の内容や進捗の見直しを行った。 ③スピーチ、討論、研究発表など「話すこと、聞くこと」に関わる言語活動や文集作り、新聞作製など「読むこと、書くこと」に関わる言語活動に取り組んだ。 ※来年度は <ul style="list-style-type: none"> ・国語科の取り組みを学年行事などと関連づけ、内容の充実を図る。 ・生徒の学習習慣の確立や学力の向上につなげるために、既存の自主教材の見直しを行う。

教科名	社会科	記入者氏名		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）	
① 到達度評価の研究 ② 外部模試やセンター試験の校内平均点のさらなる上昇を目指し、センター試験平均点越えを目指す。 ③ 論理的思考力を養うとともに生き方・在り方を考えさせる。 ④ 入学試験問題作成の研究、改善をし、平均点の上昇を目指す。 ⑤ 今後の総合学習の在り方を検討		B A A C A	①到達度評価算定方法については大きな問題が生じていないので変わっていない。観点別評価と成績の整合性が課題である。 ②今年度は一般入試受験生の日本史・政経・現社においてセンター試験の平均点を越えた。世界史、倫理もほぼ全国平均点と同じである。朝講習などの効果もあったと思う。この成果を引き継ぎ、更なる向上を目指す。 ③各学年でレポート、スピーチ、発表に取り組み、その一部は文化祭などで発表した。高2では総合学習の授業を通じて、論理的思考力を養う取り組みができた。 ④PISA型の問題を出題しようと工夫をし、取り組んだ。説明会等でもう少し学習すべき内容を開示するなどの工夫をし、レベルの高い作問をしたい。 ⑤今年度の総合担当を中心に、昨年の反省をいかしつつ論文作成までの過程の改善が行われた。より良い論文にするためにも、学校全体の協力体制が必要である。	

教科名	数学科		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
①数学科教員としての資質向上のため、授業方法等の共有化および内容改善を図る。		C	①年度進行の中で、中学・高校で使用するテキストに関しては全学年統一することができた。よって、学年による指導内容の差に関しては生じにくい状況ができた。しかし、学年内での指導内容統一や共有化に関しては、学年によるばらつきがあり、改良の余地が多々ある。この点について来年度は丁寧に行いたい。 ②定期考査問題の保管および次年度への引き継ぎが体系的にできており、評価システムに関しても昨年度の継続で十分機能している。今後は評価の割合や出題レベルについて検討をしていきたい。 ③項目①で述べたように、学年での差異がない形での準備は整っている。また、新学習指導要領に向けた内容検討も進んでいる。今後は学力推移調査の結果などと参考に、授業レベルや教科書・副教材検討を進めていきたい。 ④今年度は、入試問題結果分析などに関して集中的に進めることができ、学校説明会でも活用できた。システムに関しては今後もっと良くできると考えているので、来年度は更に工夫を重ねたい。
②到達度評価の評価制度向上にあたり、評価システムの精査を行う。		A	
③新学習指導要領実施に向けて、カリキュラムの検討および修正を行う。		B	
④数学科としてのシステムについて、計画的な検討を行う。		B	

教科名	理科	記入者氏名	
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
① 到達度評価の研究をする。		B	①より実情に即した到達度評価を行うために様々な工夫をした。結果、考査結果・小テスト・授業態度がそのまま評定となるために、考査問題や授業内容の充実に力を入れ、さらに工夫の余地を認識した ②年間を通じた実験計画を作成し、それに沿って実習書のプリントを作成した。実習書は完成までは至らなかったが、次年度、継続していきたい。 ③隔週理科新聞を中学生対象として配布し、有用と思われる外部講習会はポスター掲示をするなどして生徒への告知をできるだけ行った。来年度以降、さらに工夫を重ね、生徒の参加を促したい。 ④カリキュラム委員会と教科会を通じて、平成24年度までのカリキュラムの策定をおこなった。それ以降については来年度以降、従来通り活動していく。
② 実験実習の年間計画と実験書の作成		C	
③ 博物館主催の実験会や大学研究室見学の生徒への告知と参加を促す。		B	
④ 新学習指導要領を見据えたカリキュラムの策定		B	

教科名	外国語科		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
① STEP 1（中1中2）においては基礎英語力を定着させ、学習習慣を身に付けさせる。中1アドバンスにおいては英検4級全員合格を目指し、中2アドバンスにおいては英検3級全員合格を目標とする。		B	①家庭学習を含め基礎力を付けることの大切さを伝えてきた。しかし、考査に向けてはどの生徒も努力をしている。投げやりになっている生徒はいないので、何とかモチベーションを保たせ、達成感を持たせたい。英検に対しての意欲はどの生徒にもあるようで、中学2年生においては10月校内受験の結果、コアクラスでは4級合格者は146名、アドおよびコアクラスの生徒で3級以上の合格者は49名であった。これ以外にもすでに3級以上に合格している者は十数名いる。中学1年生では2学期から単語帳を使って週に1回テストを行い語彙力をつけ来年度の英検合格につなげていきたい。目標設定が具体的になると、取り組みやすいようである。単語テストは級上昇型のタイプなので、一つ一つの級をクリアする目標がはっきりしているので、取り組み方は良好である。追試を行い、全員合格のち次の級へと進んでいる。スピーチ発表（個人）、暗唱発表（グループ）なども取り入れ、楽しそう

<p>② STEP 2 前期 (中3) では、中学校の英文法を総合的に使って表現力を養い、ある程度長い英文を読む楽しさを知る。基礎基本を確実に身につけ、高校英語に向けて自立的学習者を育てる準備をする。英語検定3級について全員合格を目標とする。またアドバンストクラスでは準2級や2級などをチャレンジ受験させる。</p> <p>③ STEP 2 後期 (高1) は、英文を勘ではなく論理的に頭から読めるよう構造把握の力を養成する。GTECにおいて各分野別平均グレード4、速読スピード70wpmの達成を目標とする。</p> <p>④ STEP 3 前期 (高2) は、GTECにおいて各分野別平均グレード4、速読スピード100wpmの達成、特にリスニング力・ライティング力を強化する。英文を頭から読めるよう構造把握の力を養成する。</p> <p>⑤ STEP 3 後期 (高3) は、センター試験において全国平均点を+3点を目標とする。英文を頭から読めるよう構造把握の力を強化する。速読スピード100～120wpmを達成する。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>	<p>に行っている。</p> <p>② 予習、復習の習慣が付くよう、毎回「予習ノート」を配布して、その結果をチェックし、その中で英問、英答を多く入れ、英語を英語で理解する方向で自学できるよう方向づけた。基礎英文法は定期的なワークブックでの学習を習慣づけ、単語力は毎週ごとの単語テストとその追試でその定着を図った。一番効果的だったのは、各レッスンのキーセンテンスを暗唱させ、それを書き取りドリルをし、各学期末にはその集大成の「100問テスト」で徹底的定着をさせた。学年末近くに行う「スピーチコンテスト」に向けて、早くから作文指導をし、クラス毎に全暗唱させての発表、代表者の選考を行い、全体コンテストにもっていった。</p> <p>英検3級はコアクラス162名中、137名が合格し、英検準2級はコアクラスで12名、英語ハイ、アドバンストクラスでは77名が合格、2級は帰国生以外で3名合格。</p> <p>③ 6月時点で実施のGTECで、アドバンス及び英語アドバンスの平均グレードは既に4、速読スピード85.4を達成しており、その後、構造を把握して前から読むトレーニングも成果を上げている。7月及び11月の進研模試とも偏差値62以上の層は過去5年間で最も多く、順調に伸びている。コアクラスは同じく6月のGTECで平均グレードが2、WPMが53.6。毎週の単語テスト、英文法での項目毎のキーセンテンス暗唱テストへの取り組みを継続的に指導していく。</p> <p>④ GTEC (6月実施) 受験結果 全国平均スコア 445 学年平均スコア 466.8 分野別平均グレード4 速読スピード77.5wpm GTECの結果では、各分野別平均グレード4の目標は達成しているが、リスニング・ライティング分野については上位層と下位層の開きが非常に大きい。中間層でもこれらの分野を苦手としている生徒は多く、模試でもこの傾向は明らかである。また、今年度はリスニングと速読の教材をあまり扱えなかったため、この点は反省として来年度重点的に行う必要がある。読解力については、毎週単語と文法の小テストを実施した他、英文の構造を的確に捉えて読む力や、文章の論理関係を意識しながら読む力を総合的に養成している。その結果少しずつではあるが順調に伸びているといえる。</p> <p>⑤ センター試験受験者 全国平均122.8点 平成22年度高校3年生 全体平均 117.2点 一般受験者平均126.7点 進路決定者平均 109.7点 文系アド平均 163.1点 理系単独クラス平均 130.8点 帰国子女平均 167.3点 GTEC (6月実施) リーディング 88 wpm STEP 2 (中3) から意識してできるだけ多くの文章に触れさせるように心がけてきた。今年度はセンター試験対策を授業に取り入れ繰り返し問題演習をさせた。一般受験者の平均では全国平均を4.0点上回ることができた。特にアドバンストクラスは、着実に力をつけ8割を超える得点率をあげることができた。帰国生も十分に力をつけており、特にセンターリスニングでは全国平均を15点以上、上回った。</p>
--	-------------------------------------	---

<p>教科名</p>	<p>保健体育科</p>	
<p>達成目標</p> <p>① 指導と評価の一体化を図り、到達度評価の研究をする。</p> <p>② 実技の各種目における生徒の安全性の向上を図る。</p> <p>③ 心身の健康に関する正しい知識を習得することにより、自己の健全なる心身を養う。</p> <p>④ 体育の授業を通じて、躰教育を行う。(時間を守る、思いやり、協力、服装等)</p>	<p>検証</p> <p>B</p> <p>A</p> <p>B</p> <p>B</p>	<p>活動経過とその成果 (改善策)</p> <p>① 到達度評価2年を振り返り、更なる評価の研究が必要である。</p> <p>② 狭い場所での授業で、起こるべき事態を予測しながら安全に授業を展開することができた。</p> <p>③ 保健の授業など新しい資料など示し、心身の健康に関する知識を習得させることができた。</p> <p>④ 体育の授業を通して躰教育を行っているが、より一層の充実を図れるように指導して行く。</p>

教科名	芸術科		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
①	芸術の本来持っている力によって、素直で豊かな心を養う。また、作品を仕上げる課程において情操教育に力を入れた指導を行う。	A	①わかりやすい表現で生徒に伝え、教材研究を進めることによって、情操教育に力を入れた。素直で豊かな表現が出来るようになってきている。
②	芸術の基礎技術を向上させると共に、「努力の後の達成感」「継続は力なり」という事実を体験させる。	A	②自主的に練習し、みんなで作品を作り上げるという意識を高め、達成目標を明確にし、到達点をわかやすくする授業を心がけた。生徒一人一人が創造の喜びと達成感が味わえるようになってきている。授業アンケートでは、芸術の意義が明確ではないと答えた生徒が少数だがいたため、より、わかりやすい授業を心がけていきたい。
③	指導と評価の一体化を、より研究し深め到達度評価を実施する。	B	③達成度評価の評価ポイントを生徒にも明確にすることによって、よりわかりやすい評価を心がけた。生徒の実力アップにもつながった。今後も指導と評価の一体化を研究していく。
④	芸術に対する感性を育て、心豊かにする演劇、音楽コンサート、美術展、書道展などを自分で選び、鑑賞し、感じたことを積極的に自分らしい表現で報告できるように成長させる。	B	④長期休暇を利用しコンサート、展覧会の鑑賞を実施。また、授業の中でDVDなどを使い学習した。心豊かに感じたことを表現できるようになってきている。より、実技と鑑賞の連携を図っていきたい。

教科名	情報科		
達成目標		検証	活動経過とその成果（改善策）
①	到達度評価の研究をする。	B	①実習課題と考査のバランスの整合性を検討した。少しずつ評価の方向性を確認できた。引き続き研究を続ける。
②	新学習指導要領の研究をする。	B	②出版物やホームページなどにより情報収集をした。まだ情報量が少ないことから、今後引き続き研究することになる。
③	情報の幅広い知識を習得させる。	B	③時間数は少ないが、技術的な事柄や社会的な事柄など、ある程度は習得できたと思われる。
④	インターネットやアプリケーションソフトの利用方法を習得させる。	A	④十分な演習により、技術を習得することができた。
⑤	大妻女子大学との高大連携授業をする。	A	⑤うまく連携してスムーズに行うことができた。